

1. はじめに

畜産総合センター本場では、トウモロコシ・ソルガム混播を4月播種と5月播種の2系統で計510a作付けしている。近年、これらの圃場において強害雑草であるイチビ（図1）が増殖しており、収量の低下やサイレージの嗜好性の低下、給餌時にイチビ特有の臭いが生乳へ移行することなどが危惧されるため、防除の実施が急務となっている。今年度行ったイチビ対策とその結果をふまえて来年度の作付け計画を検討したので報告する。



図1

2. 防除方法

4月播種、5月播種圃場ともに、耕起後7日以内に播種を行い、播種当日または翌日に土壌処理剤を、播種21日～26日後に茎葉処理剤を、それぞれ定められた使用量の上限の濃度で散布した。さらに、残ったイチビは5月中旬から6月にかけて、下刈りや手で抜き防除を行った。

3. 結果

4月播種、5月播種の各圃場間で防除効果に大きな差があり、5月播種圃場で効果が大きかった（図2）。4月播種圃場の除草剤で除去しきれなかったイチビについて、実人数4人で14日間、のべ200時間程度かけて下刈りや手で抜く作業を行ったが、98aの1圃場を防除するにとどまった。



図2 左が4月播種圃場、右が5月播種圃場

4. 考察

4月播種圃場で効果が小さかった理由として、耕起、除草剤散布の時期がイチビの発芽時期と適合していないことが考えられた。イチビの発芽は4月から7月であり、4月播種圃場では耕起、土壌処理、茎葉処理の後に多くのイチビが発芽したため効果が小さく、5月播種の場合、耕起、土壌処理、茎葉処理の間に多くのイチビが発芽したため、より多く

のイチビを防除することができたと考えられた。これらのことから、イチビ対策を効果的に行うためには5月以降の播種を行うことが重要であると考えられた。

5. 来年度作付け計画の検討

5月以降の播種がイチビ対策として有効なことから、すべての圃場で5月播種圃場と同じ体系で播種を行うことを検討したが、他の作物の収穫と重なるため、その収穫の合間に播種が行えるよう、播種時期を5月中に分散させることとした。なお、播種を6月まで遅らせることも検討したが、梅雨の始まりと重なり播種が行えない可能性があることから断念した。また、早生、中生品種を併用して収穫時期をずらすことで、収穫が適期に行えるよう調整した。トウモロコシの播種時期が5月の中旬以降になると再生したソルガムの収穫が適期に行えないことから、一部圃場においてトウモロコシのみの作付けを行うこととした。これらのことを検討し、来年度の作付け計画を決定した（図3）。



図3 来年度作付け計画

一部圃場においてソルガムをやめることで再生ソルガムの収穫がなくなり、全体の収穫量の減少が予想されるが、良質なサイレージを作製することができれば、品質不良による廃棄量が減り、飼養牛が必要とする量は確保できるため実現可能であると判断した。来年度はイチビの対策を最重要項目として行い、長期的に質のよい自給飼料を生産する体系づくりを行っていきたい。